第３章　「趣味」を楽しむ場の形成と公共人類学
―岩手県花巻市石鳥谷町における音楽を通じた実践からの考察

佐藤　敦
SATO Atsushi

はじめに

文化人類学は、アジア・アフリカ・中南米などの諸民族社会の文化を描くことを生業にしてきた経緯がある。また西欧社会における少数民族や都市スラムを扱う研究や、セクシャル・マイノリティ、医療現場、開発援助などその範疇は多岐、多様であり、社会集団、職業文化もまた研究対象となる。調査手法としてのフィールドワークは積極的に対象社会のコミュニティに参与することで「研究者」という立場の一般的なイメージとは異なり、フィールドにていかに当事者と物理的にも精神的にも近距離で関わることができるかという挑戦の繰り返しでもある。このようにオーソドックスな概念に加えて近年は「公共人類学」という分野が登場し展開されてきている。公共人類学は何であるかという議論は後述するが、以前から「応用人類学」という分野が開発援助において語られていた。この場合の「応用」とは、開発援助の文脈で開発援助をする側、すなわち先進諸国政府や援助機関や被援助国政府や政府機関側における学問的な実用的関与を指し、「実践人類学」とも呼ばれる。応用人類学や実践人類学は言い換えれば文化人類学者の営為としてのフィールドワークや民族誌的記述といった手法が従来の開発援助実践で不足していた質的貢献に資するという観点から、開発援助の実践者側へ積極的に関与することをその目的とする。このように公共人類学、応用人類学または実践人類学の言葉の違いはあるが本論では類似するものとして捉え、その相違点について言及はしない。本論の出発点は日本の地方が抱える課題解決に何かしらの提言や貢献ができるのではないか、という主張に対して実践者側となった筆者の立場から、日本の地方での活動実践にから考察を試みる。

本論では以下の枠組みで論じてみたい。第一に、公共人類学が日本国内の地域活性化にどのような貢献ができるのか、その可能性を模索する。第二に、筆者が岩手県花巻市石鳥谷町で行っている中心市街地における賑わい創出の実践である「石鳥谷なのでロック大喜利」の実例を紹介する。そして第三に、筆者が経験した教訓から、人類学者が日本国内の地域活性化に関わる際の留意点について述べる(1)。

１　公共人類学が地域活性化に関与する意義

公共人類学はその名の通り、公共領域に関与する人類学のことである[山下、2014:9]。山下は公共領域を 4 つに分類し、公共人類学における公共領域を定義している。第 1 に、伝統的な公領域としての国家的な公共領域、第 2 に州や県、市町村などの地方自治体、地域

コミュニティ(2)といったローカルな公共空間、第3に、企業の社会的責任(CSR)の公共領域、そして第 4 に、国連、世界銀行などのような国際機関が関係する国際的な公共領域であるとする[山下、2014:9]。このように公共人類学のフィールドにおいて公共が意味するもの、分野は多様かつ重層的である。公共人類学の目的は、専門領域に閉じこもることなく、より広く公共領域において現代社会が抱えるさまざまな問題を分析し解決するために貢献することを目的とする概念である[山下、2014：3]と、その目的が学問的な貢献の先に日常生活において起こる課題解決に直接その知見を活かすという点を強調する。加えて、人類学を今日の公共領域の中で再定義し、アカデミズムを超えて現実の社会の改善に貢献しようとする新しい挑戦[山下、2014]と、公共人類学に対する考え方を述べている。

また、応用人類学あるいは実践人類学は、特に開発援助の分野での貢献が期待され、研究成果や著書も発表されている(3)。しかしながら、日本国内における研究成果としては東日本大震災にて被害を受けた岩手県宮古市の築 100 年を超える古民家の修復並びに国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）への移設展示の取り組み(4)や、原発事故と被災者のその後を追うべく人々が震災とそれにまつわる被災の現状を多角的な視点からまとめた報告［ギルら:2013]が秀逸であるが、取り組みとしては途上段階にある。

近年は日本国内の地域活性化の取り組みにその学問的蓄積が応用できるのではないかという試みがなされている[橋本 2005]。橋本は実践人類学の立場として、いくつかその特徴をあげている。代表的なものを挙げると、ひとつは「地域の文化資源を（再）発見する」というストーリーの指摘を行う、そしてもうひとつは、人類学者がいかなる「社会関係」を発見するのかという点である。実践するには研究者が自ら計画立てて遂行するか、もしくは既存あるいは新規のプロジェクトに参画するかどちらかであるが、いずれの場合も 1 人以上の協力者が伴う。すなわち実践人類学は「協働」がセットとなり成立するものである。ここで「協働」には 2 つの意味があると考えることができる。ひとつは、フィールドワークを行って「地域の文化資源を発見」することだけではなく、その資源と文化人類学的知、文化人類学を先行する学生と研究者、そして「協働」を共に担う地域住民という人的資源との社会的信頼関係をいかに築き、それを活かし、発展していくかという実践を指す。もうひとつは、地域での「社会的信頼関係」を共に構築するなかで、育成された「人的資源」が活きる「協働」が重要視される。

「協働」の内容についての課題については、大きく 3 点について議論の余地があるだろう。第一に、発見した「文化資源」にいかなる付加価値、すなわち新たな評価の視点をつけて還元するかどうかということである。研究者がフィールドワークで見聞きしたことを独善的に「学術的な成果物」にするのではなく、そのものに対して「なぜ」「いかなる点で」価値があるのかを説明し、当事者間で共有することで「どのようにして」活かすのかを協働の場で検討することが重要である。そのブレーンとしてあるいはファシリテーター役として人類学者の関与と活躍が期待されるだろう。

第二に、実践を通して、いかに地域の人々や関与する人々が育成されるかということである。関与する人々には学生だけではなく、教員もまた含まれることが想定できる。実践に関与する場は多声的で複雑な人間関係で構築されている。また職業的あるいは社会的ステータスによって関わり方を変えてくることがある。外部から関わる人類学者は、対象社会の人々と生活の場をともにし、多角的に観察を行うような典型的な人類学的フィールドワークは対象社会の人々に警戒される恐れがある。よって関与には普段以上の対象社会への配慮が必要となる。むしろ対象社会内部の人々に身を預けてしまい、言及を求められる場合を除いて、一旦は内部の人々の思考に身をゆだねることが望ましい。外部からやってくる人々は、対象社会にとってはその存在だけでも非日常的であり、不安さも感じるだろう。外部の人間はその土地に足を踏み入れるだけでも内部の人々にとっては「介入行為」であることを自覚すべきである。

そして第三に、文化人類学的な社会貢献とはどのようなものかということである。「文化人類学的」という意味について関根はその要件として、まずフィールドワークを通じて対象社会の「文化を知る」行為にあるという[関根 2008:8]。すなわち、ある社会の人々によって共有されている習慣、言語、社会組織、親族関係、政治、経済、規範などからなる生活様式「全体」をフィールドワークを通じて経験的に感得するとともに、文化的事象の持つ意味を、その文化を実践している人々の行動の動機や価値、意図などと関連づけて解釈することであり、[関根、2008:8]「学問」あるいは「学術」という言葉に内在してきた「客観」、権力性や権威を中和し、現地の人々の視座に「偏る」ことによってはじめて、その扉が開かれる[関根、2008:9]と論じている。関根は開発援助の文脈において、と前置きをしているが、地域活性化の文脈においてもまた同様であると思う。例えば日本の地方が抱える課題について地域の人々とともに考え行動することが望まれるのであれば、地域に関わることで対象社会の合理性を疑うような事象に出くわすことが多々あるという事実を一旦引き受け、地域住民との対話の機会を確保することが重要である。よって文化人類学的な社会貢献とは何かというと、地域の人々の視点に寄り添いながら日常的会話から具体的活動に発展する可能性があることを念頭に関わり模索していく営みであると言えるのではないだろうか。これらのことから公共人類学は「協働」なしには語れず、対象社会の人々のネットワークや能力あるいは可能性、加えて地域の地政学的な特徴などそれらがどのように連関しているのか、いかなる世界に地域の人々は生きているのかを捉えながら、どのような実践が可能となるのかを地域の人々とともに模索し、行動に移していくことが公共人類学における「協働」の意味であると思う。

２　実践事例—岩手県花巻市石鳥谷町「石鳥谷なのでロック大喜利」

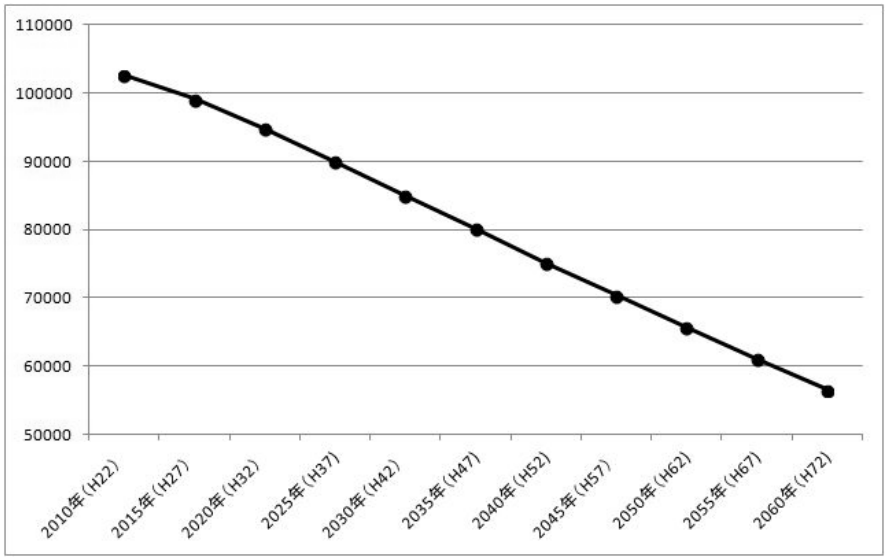
2.1　地域の概略

岩手県花巻市石鳥谷町は 2006 年（平成 18 年）1 月に旧花巻市と稗貫郡大迫町そして和

賀軍東和町と合併する以前は、稗貫郡石鳥谷町であった地域である。地域の中央を国道 4 号線バイパス、JR 東北本線そして北上川が貫く。産業の主体は稲作ならびに野菜栽培といった第一次産業が盛んである。石鳥谷を含むいわゆる「南部藩」と呼ばれるこの地域は 15 世紀ごろから酒造りが盛んにおこなわれていた地域である。南部藩の御用商人がもたらした酒の大量仕込み樽と酒の製法は近江商人の資本をもとに規模を拡大した。やがて藩の外へ酒造りの技術を持った者たちが出稼ぎに行くようになる。これが現代においても国内最大勢力を誇る日本酒造りの技能者集団「南部杜氏」を生んだとされる。また旧石鳥谷町時代から社団法人南部杜氏協会の事務局および教場が置かれているため、その周辺施設とイベントを合わせて石鳥谷町のキャッチフレーズとして「南部杜氏の里」と呼ばれている。

花巻市の人口は合併前の平成 12 年（2000 年）の 107,174 人をピークに減少傾向にある。将来人口推計を見てみよう。平成 27 年 10 月 1 日時点の住民基本台帳による実際の人口 99,135 人から算出した推計はこのようになる(5)。

表 1-1 花巻市人口推計（2010 年～2060 年）



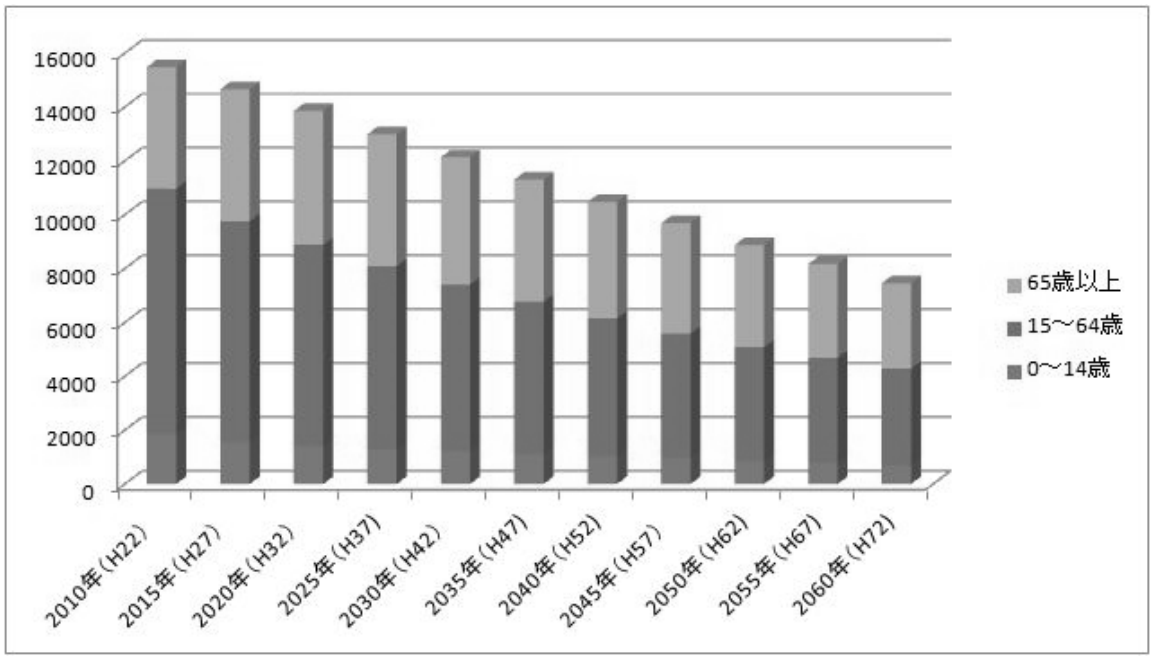
花巻市人口推計ビジョン（2017 年）よりデータ抜粋し作成

表 1-1 から見てわかることは、2060 年（平成 72 年）には花巻市の総人口が 56,569 人まで減少する。そして 2010 年（平成 22 年）の住民基本台帳人口の 102,607 人に比べ半減（55.1 パーセント）する見込みであることである。これは花巻市が人口減少対策を講じないことを前提とした場合である。現状として、2018 年 1 月時点の花巻市の総人口は 96,940 人であり、世帯数 37,070 は 2015 年（平成 27 年）の 33,799 と比べて増加しているものの、0 歳から 14 歳の年少人口や 15 歳から 64 歳の生産年齢人口は年 1 パーセント前後で減少している。これらのことから、花巻市は「花巻市まち・ひと・しごと創成総合戦略」を 2015 年

度（平成 27 年）から 2019 年度（平成 31 年）の 5 か年計画で実施している。

石鳥谷地区（旧石鳥谷町）は 2010 年（平成 22 年）の人口が 15,484 人であったが前掲の花巻市全体の人口動態推計のとおり（表 1-1）人口は減少の一途を辿ることになることが予想されている。したがって地域の担い手の人口流出、生産年齢人口の減少は合併後の花巻市にとって大きな課題であることは間違いない（表 1-2）。

表 1-2　石鳥谷地区の人口動態推計（2010 年～2060 年）



花巻市　人口推計ビジョン（2017 年）よりデータ抜粋し作成

確かに将来的に考えれば実際問題として直面している少子高齢化は若年層の減少あるいは他所への流出が要因とされている。花巻市そして石鳥谷地区においても提示したデータから明らかに見える。しかしながら現状として地域のイベントは頻繁に行われている。表 1-3 に示した石鳥谷地区の年間イベントスケジュールを見てみよう。記載されているイベントはここに表しているもののほかにも石鳥谷地区のさらに周辺で行われているもの、たとえば神社の祭礼、運動会などの地域行事がある。またそれらに直接参加するだけではなく、会場設営や運営スタッフとしても人々は関わっていく。スタッフの多くは複数の地域の組織に関わっておりそれがこの地域社会で生活する一員として当然の営みと考えられている[6]。加えて毎年のように開催されるイベントでも、数か月前～1 か月前くらいから実行委員会が会議や準備にとりかかるため、年中イベントに追われるようになる。

表 1-3　石鳥谷地区の年間イベントスケジュール

4月	酒蔵まつり春の陣
5月	
6月	南部杜氏の里まつり(5月末の場合もあり)
7月	酒蔵まつり夏の陣
8月	石鳥谷夢まつり(花火大会)
9月	石鳥谷まつり
10月	酒蔵まつり秋の陣　　市民芸術祭
11月	
12月	商店街イルミネーション　酒蔵JAZZ
1月	
2月	酒蔵まつり冬の陣
3月	

そうするとイベントを企画する側も運営する側にも、他のイベントや地域行事でいつも同じメンバーで動いている姿をよく見かけることになる。この地域において「若者」の範疇に数えられる人たちは、年齢構成は 30 歳代～40 歳代、50 歳代にまで至る人々がそのカテゴリーに含まれる。こうした「若者」が地域を担っているのである。では 10 代～20 代はというと、地域行事に自発的に関わるというよりもむしろ、10 代は、例えば中学校の一学年分の生徒全員が授業の一環で関わるか、あるいは「若者」の子として動員される。20 歳代では所属している団体、例えば消防団や商工会、農協青年部という団体の活動として関わることになる。表 1-4　石鳥谷地区の人口と構成比を見てみよう。

表 1-4　石鳥谷地区の人口と構成比

構成	人口(人)	14381
	男性	6771
	女性	7610
15歳未満(年少)		1502
15～64歳(生産年齢)		7916
65歳以上(老年)		4963
構成比	年少人口	9.7
	生産年齢人口	54.4
	老年人口	35.9

花巻市　コミュニティ地区別・年齢別人口構成率（平成 29 年 3 月末現在）より作成

石鳥谷地区は年少人口が 10 パーセントに満たない。先述の通り、小中学校の生徒は部活動、休日はスポーツ少年団の練習や試合がある。高校生、大学生も部活動などで多忙であり、地域行事にまで時間を割いて関われない。よって実際には 30 歳代～50 歳代が地域の行

事に準備から当日の運営、そして後片付けまでの一切を担う。老年人口の 60 歳代～70 歳代は自治会役員や区長あるいは公民館長を複数引き受ける人もいる。よって、数少ない 10 代～20 代もまた、複数の団体に所属し、何かあれば動員される対象となる。よって、自分自身の志向に基づいた行動がとりにくく、逸脱はコミュニティとの関わりに影響する(6)。

2.2 「石鳥谷なのでロック大喜利」の開催に至る経緯

前掲の表 1-3 のとおり、年間通してイベントが終わるとすぐに次のイベントの企画会議や準備が行われるサイクルを繰り返している状況と、イベントに参加するのではなく「動員」され、イベントが終われば疲労困憊している人々を毎回目の当たりにしていた。イベントによって疲弊する原因としてはこの点に集約できるだろう。イベントスタッフが楽しんでいない、もしくは楽しめないということである。おそらくイベント開催当初は楽しんでやれたのかもしれない。しかし回数を重ねるごとに「やらされている感」がメンバー内で感じる者が出現する。指示命令系統が一方的になり多声的な場でアイディアを出し合い「みんなで作り上げる」ことができなくなる。結果的にはイベントをやることが目的となり、「なんとかやらなければならない」雰囲気が「やらされている感」を生み出すのである。そうするともはや、スタッフ側に楽しみを見出すことはできなくなるのである。当然ながらイベントそのものもつまらないものになるのである。このような「イベント疲れ」をしないような「賑わい創出」はできないだろうか、という命題を掲げて「毎回ある特定の音楽ジャンルあるいはアーティストの知識を小集団の中で深く堀り下げて楽しむ企画」を立案した。その名は「石鳥谷なのでロック大喜利」である。

名前は石鳥谷の「石」すなわち英語でロック(Rock)と訳し、音楽のロックと掛け合わせた。そして「鳥」は鶏肉料理でもつつきながら、という意味である。最後の「谷」は「屋」や「家」に置き換えて、「ロック好き、音楽好きな老若男女問わず集まれる室内」という意味である。

2.3 「石鳥谷なのでロック大喜利」のコンセプト

コンセプトとして第 1 に、地域資源としての趣味を扱う。第 2 に、年齢層横断型のイベントにする。規模は小さく、参加者相互対話型にすることを前提とする。第 4 に、誰がやってもよく、継続しなくてもいい。以上の 4 点を念頭に企画を立案した。

「地域資源」と聞くと、地政学的な特徴や伝統文化的なものを想起されるが、この企画は地域に住まう人々が持つ「趣味」に焦点を当てた。その趣味の中から「音楽」について取り上げ、日常的に好んで聴いている音楽にまつわることすべてについて人前で披露する場を設けようという趣旨である。ここでは楽曲を演奏できるということよりも、好きで聴いている音楽のジャンル、アーティストやグループ、楽曲について知っていることを披露しそれを共有できる人々の間で楽曲を聴き、蘊蓄を聞くことがメインとなる(7)。

この地域にとってスポーツは、身近な他者とチームに加入するものが前提となる。言い換えれば、他者との力関係によって好まないものも好きにならざるを得ない、好きであることを強いられる、またそのような振る舞いが求められることもある。ところが趣味が文化系、ことに音楽になると様相が変わる。自分の持てる知識を語ることに憚らない(8)。音楽を通じたイベントはこの地域では商工会議所青年部を「卒業」した 40 歳代から 50 歳代後半までの年齢層で構成するグループがジャズの音楽家を招聘して毎年演奏会を開催している。しかしジャズの音楽家のファンがその時だけは県内外からやってくるものの、イベントをきっかけとした副次的なものは生まれていないだけではなく、イベントそのものの規模が拡大していくことに対してスタッフからは戸惑いの声も聞かれた。運営に携わるグループのメンバーは開催運営に疲弊している様子であった。よってこの企画の特徴として有名なアーティストを呼んで何かをする、コンサートやライブ活動をしてもらうことではない。お互いに膝を突き合わせながら好きな音楽について小規模で語り合えることが「売り」とした。また人が集まれる場所と CD やレコードなど音源を流すことができるオーディオ装置があればよく、大音量である必要も高級なオーディオ装置も不要である。コンセプトは単純明快かつ誰もが真似てよく、アレンジも容易であることである。予算は外部講師が必要な場合は活動経費から捻出することができる。基本的には開催にかかる経費は会費ですべて賄え、また公的機関からの助成金や補助金も使用しないため開催時期や回数、開催内容についての制約はない。また「ロック」と冠しているがジャンルは問わない。

筆者がこのイベントを企画したのは、元石鳥谷町役場職員である A さん(60 歳代　仮名)との関わりがきっかけである。A さんは実の娘にも「初対面の人に会うと必ず「あなたはジャズ好きですか？」と尋ねるので困る」と怪訝な顔をされるほどのジャズ好きである。また、1970 年台の日本のフォークソングも非常に好み、音楽が好きであることを公言して憚らない人物である。日常的には田んぼを所有し稲作を営み、花巻出身の作家である宮澤賢治の愛好会会員でもある。しかし彼の悩みは日常的に自分の趣味を理解してくれ、ともに語らう相手が近くにいないことであった。こうした趣味を語り合って共有できる環境にない人々同士が集まれる場を作る企画がスタートした。

2.4　企画開催

第 1 回は A 氏が一番好むジャズをとりあげた。会場は A 氏が会員となっている宮澤賢治の愛好会の代表が所有する施設を借用した。この施設は元々昭和の初期に宮澤賢治が例外で苦しむ稲作農家たちのために肥料設計、農事相談を行ったゆかりの場所に建てられたものである。当時の建物ではないが「ゆかりの地」に建てられた店舗兼民家を会の代表が、空き家になり売りに出されていたタイミングですぐに買い受けたという。宮澤賢治は生前レコードが好きで、よく購入していたのが海外のレコード会社に知れるところとなり感謝状が贈られたという[原子 2013]。音楽好きな宮澤賢治のゆかりの地に立つ建物「石鳥谷　宮

澤賢治　塚の根」はまさにうってつけの場所であった。

写真１ 「石鳥谷 宮澤賢治 塚の根」施設写真

図１　レコード観賞会ポスター

会場の「石鳥谷　宮澤賢治　塚の根」は 2 階建てであり、かつて 1 階では新聞店を営んでいた建物である。店舗部分だったところは現在、カーペットが敷かれて椅子とテーブルが置かれている。小上がりは 6 畳敷でテーブルとテレビが置かれており、旧店舗部分と合わせて宮澤賢治作品の朗読会などが開催されている。１階奥は台所とトイレ、座敷部屋が１部屋ある。2 階は 12 畳の畳敷きの広間と 4 畳ほどの畳の部屋が 1 部屋ある。この部屋は東の方角に窓があり、窓からは北上川や北上山脈の山々を望むことができる。イベントは A 氏が選んだジャズのレコードをただ会場で流すだけではなく、そのアーティストや楽曲そのものについて解説や思い出を語ってもらい、その間に音楽を流すというラジオ DJ スタイルをとった。機材は A 氏が日々自宅で使用している簡易なオーディオセットを持参しそれを使用した。

参加者の呼びかけは図 1 のようなポスターを作製し、石鳥谷地域 10 か所に掲示を依頼した。また A 氏が直接参加の声がけをしたいという申し出があったので、20 部ほど印刷し配布をお願いした。加えて筆者の SNS アカウントより呼びかけを行った。結果、当日は 20 人を超える参加者となった（写真 2 と 3)。年齢層は 20 歳代から 70 歳代まで幅広く、多くはA氏が声がけをした 60 歳代であった。

写真２と３　会場風景（立っている方がＡ氏）

Ａ氏が声がけをしたのは、花巻市在住の宮澤賢治の愛好会のメンバーが中心であったが、声がけしたメンバーからまたその交友関係に伝わって参加者が増えたようである。よって石鳥谷地区の人々よりもむしろ広い意味で「花巻市内全域から」参加者が集まったということになる。またＡ氏が誘った方の中には「せっかく開催するのだから、うちで使っている音響設備を貸してもよい」という申し出をしてくださった方がいたり、また自分の家にあるレコードを持ってきたので紹介したい、紹介してほしいとジャズのレコードを持参してきた参加者もいた。このような想定外のことが起こっても企画の枠組み自体が緩やかであるため、柔軟に対応することができるのである。

筆者のところには企画開催後、「今度はいつ開催するのか」「xx さん（石鳥谷地区在住の方の名前）はレコードたくさん持ってたよ」といった情報が舞い込むようになった。そうすると「開催を継続しなければならない」という衝動に駆られるのだが、誰かのためにやるというよりはむしろ、自分が楽しめる範囲と分野でやりたいという欲求のほうが強くなる。つまり誰かが、誰かのためにやるよりも、自分ひとりでもやれて、自分が楽しいことをやる方が行動が軽くなり、また「楽しそうなことをやっているあの人は何をしているのか」と先方から尋ねてきたり、一緒に企画を手伝ってくれる仲間が自然に増えるのである[8]。

ジャズの企画は「成功」であったと思う。しかしこれは試行の企画であり、人を集めることに音楽を使ったらどのようになるのか、そもそも成立するのかという疑問を解決するにはこの一回だけでは判断できない。「石鳥谷なのでロック大喜利」は“大喜利”と冠しているがこれは、ある特定のジャンルやアーティスト・グループ、楽曲について語れる「複数の人物」に参加してもらい、自由に発言してもらうという企画である。

この企画は筆者が花巻に赴任した際に知り合った、石鳥谷地区を拠点に活躍するミュージシャンＢ氏をメインの講師に迎えた。Ｂ氏が影響を受けた特定のアーティストとその楽曲について「講義」をお願いするべく実現したものである。参加者については前回同様、当方の SNS を通じて呼びかけた。またＢ氏のほうからも積極的に氏の SNS アカウントから告知をしていただいた。会場は前回同様、「石鳥谷　宮澤賢治　塚の根」で開催した。参

加者は約 30 名ほど、主に B 氏のミュージシャン仲間であった。B 氏は会の当日にレコードや CD だけではなく、自身が弾くための楽器（キーボード）を持参してくれた。B 氏に企画の意図を説明した際に、「楽曲の解説もお願いしたい」旨を伝えたところ、楽器を持参してくださったのである。これは今回開催した企画の想定外のことの一つである。また、B 氏は今回「大喜利」スタイルでやる旨について「知り合いも講師で呼びたい」という提案をしてくださった。よって、この日は B 氏とその仲間 4 名が「講師」としても参加してくださった。B 氏はミュージシャンで生計を立てているわけではなく、花巻市内で広告デザイン会社経営を生業としている。石鳥谷在住の B 氏であるが「こんな場所（石鳥谷　宮澤賢治　塚の根）があったとは知らなかった」、また建物の両隣が空き地もしくは夜間は営業していない店舗であることから「音楽やるにはとてもいい場所」と評価した。地域に住まうことと、地域のことを「知っている」ことは異なる。生活圏が他所であれば、地域のことについて知らないことがあるし、また関心を傾けなければ知ることもないのである。地域にある施設の活用はまずその施設の宣伝のために利用してもらうことが重要なのである。そして想定外であったことのもう一つの出来事として、B 氏以外の「講師」を務めてくださった方たちから「私なら xx（アーティスト・グループ名）も話せるのでその時はぜひ（呼んで）」というお声がけもいただいた。

図 2 石鳥谷なのでロック大喜利（第 1 回）告知 SNS ページ（抜粋）

2.5　企画の波及効果

第 1 回の企画は特定のアーティスト・グループに絞って語り合うというコンセプトであったが会場の規模感にあった参加者数であったこと、また想定外ではあったが参加者自ら「講師」として名乗りを挙げてくださった方が出てきた。これも含めて結果的に「成功」であったといえる。

その後この「石鳥谷なのでロック大喜利」は第 2 回も開催し、参加者もリピーターがついてきた。また職場内でも話題に上がるなど徐々にこの企画は知名度を増しつつある。波及効果としてはこのようなことがあった。第 2 回開催時に、A 氏が誘った参加者が「まさにレコードを使ったイベントをしたかった」と話しかけてきた。60 歳代後半の男性だが、仮に C 氏とする。C 氏はかつてコンビニエンスストア経営者であった。また商工会青年部の元会員で、先述の商工会青年部を「卒業」した 40 歳代から 50 歳代後半までの年齢層で構成するグループにもかつて所属していた。青年部時代はフォークソングや、シンガーソングライターの楽曲を仲間と一緒にバンドを組んで地域のイベントで演奏していた経歴を

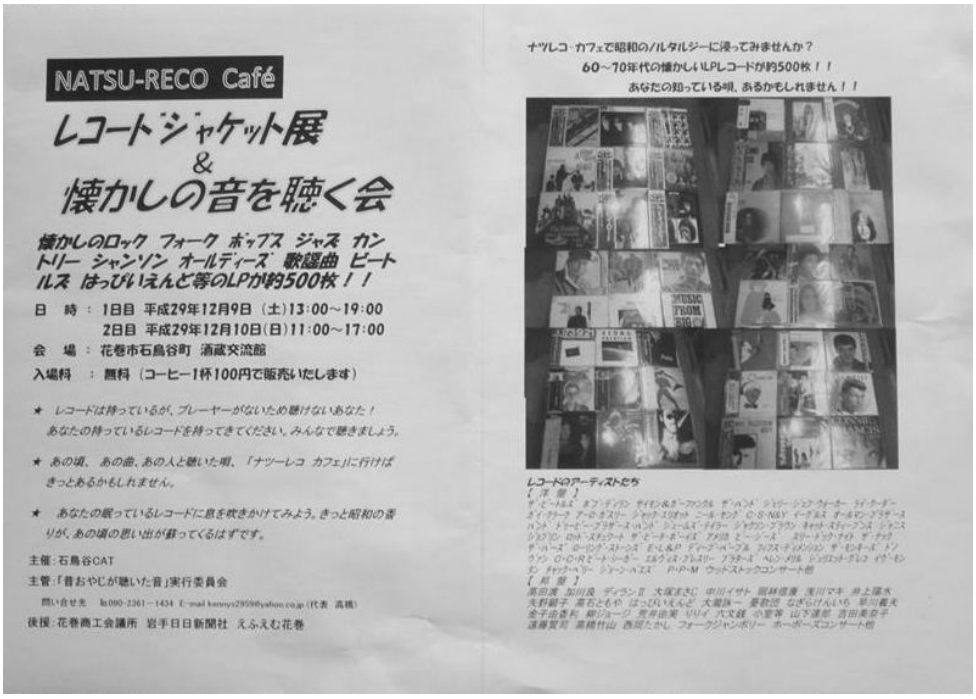


図 3 「ナツレコ」開催告知チラシ

もつ。加えて自宅には 500 枚以上のレコードを所有する、いわゆる「レコードコレクター」である。C 氏は不定期で自宅にあるレコード部屋を開放し、商工会青年部時代からの知り合いを呼んではお酒と音楽を楽しんでいるという。「レコードジャケット展＆懐かしの音を聞く会」（通称「ナツレコ」）を、その「知り合い」を当日スタッフとして動員して開催することになった。

筆者と異なるのは、会場をさらに大きな場所に移したこと、そして告知には商工会議所やローカル FM 局や新聞社の後援を得たことである [9]。レコードの提供は主催の C 氏のほか、花巻市内の高等学校の校長や A 氏も加わり、各々が得意とするジャンルのレコードを持参した。結果的には 1000 枚近いレコードが会場内に並べられた。開催は 2 日間で、のべ 100 名を超す来場者でにぎわった（写真 4）。スタッフは来場者にコーヒーを提供したり、

レコードの設置と撤収作業に従事した。特別に大掛かりな装置も舞台も必要がないことと、スタッフもまた音楽を好むメンバーが集まったこともあり、全員が楽しむことができたように思える。

写真 4　「ナツレコ」開催時の会場

写真 5　「ナツレコ」実行委員会

このようにスタッフも楽しめる余裕のある規模、開催コンセプト、そして企画の明快さは来場者にも確実に伝わる。いわく、この企画の想定外であった点は 1 日目来場した人が 2 日目のリピーターとなったり、「このレコードをかけてくれ」と自宅からレコードを持ってきてくれる来場者がいたことである。こうした直接的な反応がすぐスタッフに返ってくるのもイベントとしてのやりがいを感じることができるだろうし、また次の企画実施に向けての励みになるであろう。先述のとおり、筆者が行っているこの音楽を通じたイベント企画は誰が行ってもよく、また形を変えてやっても楽しめるものである。いつでも同じメンバーで実施する必要もない。主催者自身が一番楽しくやれることが最も大事なことであるといえる。

３．まとめ—文化人類学の可能性

以上のように「石鳥谷なのでロック大喜利」の事例から考察してみると、地域の勢いの減衰の理由として若年層の人口減というのは有意な相関関係にあるのかは疑わしくなる。私が事例の中で関わった範囲の人々は生産人口の中でも年齢層が高い人々が多かったのは事実である。しかし「音楽」というキーワードを用いて、世代を超えて楽しめること、強制力をもたないこと、小規模で自然な離合集散を繰り返せるイベントを単発で誰でもやれることはこれまでこの地域で行われてきたイベントやスポーツ少年団とは趣を異にするものである。単純に良し悪しをつけるわけにはいかないが、「世間体」や「近所付き合い」が先立つことなく自分の志向に忠実な態度で物事を楽しむことを良しとする環境づくり、加えて趣味を共にする人々が集う居場所づくりをあらゆるところ、あらゆる形態で実践していくことは若年層も高齢者層も関係がないのである。

筆者は地域資源を伝統芸能やスポーツといった目に見えるようなところに求めず、むしろ内省的な文化的要素の趣味に目を向けた。そして「音楽を聴く」「アーティスト・グループについて語り合う」ことを通じて人がつながる仕組みを作ったのである。

ではこうしたイベント企画を成功させるために人類学はどう貢献できるのか。ひとつは、人類学が地域における「社会的信頼関係」（ラポール）の育成を目標としていることが土台になっているということである。筆者は賑わいづくりのイベントを企画運営することを念頭に人々と関わってきたわけではない。人類学のオーソドックスな方法による対象地域のとらえ方、すなわちホーリスティックな世界観で地域をとらえようとした。よって地域の祭礼や商売、生活空間への参与観察をその地域に暮らすことで実践した。開発援助に関わるコンサルタントや専門家、ボランティアのように「帰る国」があることが前提で関わってきたわけではないのである。よってその地域の人々の志向に近づくことは避けられない。人類学者が地域活性化に関わるということは、海外のフィールドワーク以上に対象に対して遠ざけて物事を見ることを意識しなければならないところに腐心することになるだろう。そういった環境の中で培った人脈によって可能になる実践は、地域の人々なしには成しえないことである。筆者が何かをした、というより信頼してくれて実践に至ったという感覚である。公共に資することを目的とする公共人類学という概念は大学・研究機関の垣根を超えて広くその知見を利用することが目的となっている。しかしそもそも学問はその知見の蓄積をいかに実社会に還元・応用するかというものであったのではないか。また逆に、学問はいかに実社会のあらゆる現象、文化に対しても興味関心を示し、その領域において知的探求を行い、また実社会に還元するというものである。すなわち研究者と実社会の間は垣根なく意見や情報が常に行き来するものが学問のあり方としてふさわしく、研究者もまた実社会のメンバーであるという意識を常に忘れてはならないと考える。とはいえ、そのためには社会的信頼関係（ラポール）形成と持続をいかに行うかが重要なのである。

注

(1) 本研究プロジェクトが社会学講座のメンバーで占められており、その親戚学問の文化人類学講座出身の筆者がその末席を汚すのは心苦しいがプロジェクト参加者として執筆させていただくことは大きな喜びである。

(2) 山下は国家と比較しながら「より小さな地域社会」と表現している。

(3) ノラン（2007）、佐藤・藤掛（2011）、関根（2015）など

(4) https://www.rekihaku.ac.jp/others/news/effort/pdf/ring_houkoku.pdf（2018 年 1 月 31 日閲覧）

(5) 人口推計の算出について、花巻市は国の「まち・ひと・しごと創成推進本部」の推計の設定

条件である、合計特殊出生率 1.42 が継続すること、移動率が 2020 年（平成 32 年）までに現行の 0.5 倍になるとした設定条件をもとにしている。

⑹ 子供がいる家庭ではスポーツ少年団の練習や試合の資機材運搬、子供たちの送迎も「当番制」で行われる。また消防団に参加している男性たちの年齢層は幅広く、20 歳代も少なくない。

⑹ 花巻市は 2007 年（平成 19 年）に「花巻市スポーツ振興計画」を策定し「生涯を通じて欠くことのできない文化の一つ」として推進いているが、方や市民からは「部活動やスポーツ少年団の活動に疲れてしまい、授業に集中できない、家庭学習が十分にできない」という問題も挙げられている。

⑺ 演奏できる人がいればなおさらよいが参加の絶対条件ではない。むしろジャンル、アーティスト・グループ、楽曲に対する「思い入れ」をいかに情熱的に語ることができるかというところに焦点を置く。

⑻ 音楽好きが高じて経営していた店舗を閉めて、店舗跡を丸ごとレコード観賞用の部屋に仕立てた者や、ガソリンスタンドを経営しながらローカル FM 放送局のパーソナリティを務める者もいる。

⑻ 長田は「入会までのステップを踏む」点に着目し、「会」や「イベント」の人集めは関わり方に細かな段階を設けて、その判断をやってくる人の側にゆだねる仕組みが大切であると述べる[長田 2016:199]。

（9） C 氏いわく、施設を借りる際に個人では貸してもらえないだろうと勘違いして、商工会議所などの後援があれば借りられるだろうと思っていたという。花巻市の場合は指定管理施設の多くは商用利用でない限りは無償あるいは冷暖房費負担のみで借りることができるところが多い。

参照文献

長田英史，2016,『場づくりの教科書』芸術新聞社

ギル・トーマス＝ハーヴェイ、ブリギッテ・シテーガ、デビッド・スレイター編，2013,
東日本大震災の人類学―津波・原発事故と被災者たちの「その後」、人文書院

佐藤寛・藤掛洋子（共著），2011,『開発援助と人類学　冷戦・蜜月・パートナーシップ』
明石書店

関根久雄，2008,『「人類学的」、その意味するもの』「アジ研ワールド・トレンド」特集　開
発援助と人類学、2008 年 4 月号　第 151 号、アジア経済研究所、pp.8-11

関根久雄，2015,『実践と感情　開発人類学の新展開』春風社

原子朗，2013,『定本　宮澤賢治語彙辞典』筑摩書房

ノラン・リオール（著）、関根久雄ら（訳），2007,『開発人類学－基本と実践』古今書院

山下晋司（編），2014,『公共人類学』東京大学出版会
（インターネット）
国立歴史民俗博物館
https://www.rekihaku.ac.jp/others/news/effort/pdf/ring_houkoku.pdf
民家からの被災民具・生活用具の救援活動　宮城県気仙沼市の尾形家住宅におけるとりくみ（2018 年 1 月 31 日閲覧）

花巻市　花巻市まち・ひと・しごと総合戦略（第 1 次改定版）平成 28 年 3 月
https://www.city.hanamaki.iwate.jp/shisei/401/425/p006818_d/fil/sougou-senryaku-kaitei.pdf（2018 年 2 月 6 日閲覧）

花巻市人口ビジョン　平成 27 年 10 月
https://www.city.hanamaki.iwate.jp/shisei/401/414/p006610_d/fil/20171225kaiken-7-2.pdf（2018 年 2 月 6 日閲覧）

石鳥谷の人口動態　2018 年 1 月末現在
https://www.city.hanamaki.iwate.jp/shisei/417/419/p001315.html（2018 年 2 月 5 日閲覧）

１　花巻市の地方創生の取り組みについて
https://www.city.hanamaki.iwate.jp/shisei/401/414/p006491_d/fil/20171023kaiken-1.pdf（2018 年 2 月 6 日閲覧）

コミュニティ地区別・年齢別人口構成率（平成 29 年 3 月末現在花巻市住民登録人口　日本人＋外国人）
https://www.city.hanamaki.iwate.jp/shisei/417/419/p001315_d/fil/1.pdf（2018 年 2 月 7 日閲覧）

第 2 期花巻市教育振興基本計画素案に対する意見等
https://www.city.hanamaki.iwate.jp/shisei/401/428/p006957_d/fil/27-3siryou3.pdf（2018 年 2 月 7 日閲覧）

東洋経済 ONLINE　地方は儲からない「イベント地獄」で疲弊する―現場がボロボロになる 3 つの「危険な罠」とは
http://toyokeizai.net/articles/-/154998（2018 年 2 月 10 日閲覧）